

タイトル：僕の尊敬する人

作：亜古 鐘彦

元にした作品；なし

文字数：4,287 文字

あらすじ：

弟が何か熱心に文章を書いている。『尊敬する人』というテーマで作文の宿題が出ているらしいが、筆の進みが悪そうだ。…え！？今、指の隙間から『兄』って見えた！尊敬する人、あに！？弟よ、待っている。兄がすぐそれに書けるような素晴らしい尊敬できそうなエピソードを生み出してやる！

弟が何か熱心に文章を書いている。小学校の宿題だろうか。

一心不乱とも見えるが、あくまで冷静に推敲しながら書き進めているとも見える。

弟はあまり派手に感情を露わにするタイプではないが、十二年も一緒にいればわかる。こんな風に口を尖らせて、左手で頭の後ろをさすっている時は決まっている。何か重大な物事に取り組んでいるのだ。

歳が四つ離れた弟は、なんでも器用にこなす、というタイプではないが、考えて着実に前に進むことができるタイプと言えよう。我が弟ながら大変に粘り強く、信頼できる人間である。

小学校の宿題で文章を書くと言えば何だろうか。読書感想文、将来への展望、好きな偉人やなんかを書いたような気がする。そういった類だろうか？

案ずるより聞くが易し。

「何の作文を書くんだ？」

「これ？ 尊敬する人」

尊敬する人か。

「おお、そう言えば兄ちゃんも書いたなあ。もう書く人は決まっているのか？」

また弟は、頭の後ろをさすりながら「うーん」と唸る。

「ちょっと考え中」

弟は書きかけにした原稿用紙を軽く腕で覆って隠してみせた。

「兄ちゃんがアドバイスしてやるぞ。見せてみる」

「だめだめ！ 恥ずかしいから！」

途端にがばっと原稿用紙の上に身を乗り出し、本格的に原稿用紙を隠した。小学生らしい意地の張り方で可愛いやつだなど、半ばニヤニヤしながら笑っていた。

しかし次の瞬間、私は目を見開いた。弟の指の隙間から一瞬文字が見えたのだ。『兄』という文字が。

兄！？！？あ、あ、あに！？！？

なんと、弟の誉れ高い『尊敬する人』として、兄が選出されている。

念の為言っておくが、二人兄弟である我々の家族構成的立ち位置でいうと、兄とはまさしく、この私のことである。

これは歴史的快挙かもしれない。数ある選択肢の中から、ただ四年ほど先に、この家に居つきただけの私を尊敬してくれているとは。

だがしかし待て。弟は「ちょっと考え中」と言っていた。つまり弟は、「作文を提出せねばならぬという便宜上、身近にいる兄を尊敬する人として選出したものの、いささか取り立てるようなエピソードがない」という状況だと推察される。選出された側として非常に申し訳ない。迷いなく書くことがあれば、弟もあれほど後ろ頭をさすすることもなかったろう

に。ほわほわした後ろ頭がすり減っていくのを黙ってみている訳にはいかない。よし、兄は決意したぞ。

「その作文の締め切りはいつなんだ？」

「今週の金曜日～」

今日は日曜だから、この兄に残された時間は月曜から木曜の四日間。この間に、書くに値する兄の尊敬できるエピソードを生まれさせよう。

捏造？否！まだ世に出ていないというだけで、ポテンシャルは元よりあるはずだ。それを具現化させようという、ただそれだけなのだ。

月曜。動植物への慈しみの心を見せよう。

いつもより早く目を覚まし、リビングの観葉植物たちへ水をやる。

「おはよう」

起き抜けの弟に気持ちの良い挨拶をして、リビングの水槽で飼っているメダカの様子を伺いつつ、餌をやる。その後、慈愛を込めて水槽を眺める。動植物への関心、愛情はさることながら、朝にこんなに余裕があるということは人間的余裕にも繋がる象徴的なことではなかろうか。我ながら素晴らしいプロデュース力。

そんな中、弟は朝練に遅れるからと慌ただしく朝食をすませ、「いってきまーす！」と叫んで学校へ駆け出した。

これは不発か？

火曜。実は料理も出来るというところを見せよう。

きっと、やってみれば思ったよりできるものなのだと、なぜか妙に自信があった。

「母さん、今日は僕が夜ご飯つくるよ」

「えっ？ほんと？…ドッキリ？」

「いえいえ。まあ任せてよ」

母は、猜疑心と無邪気さを混ぜこぜにしたような複雑な表情で僕を横目に見ながら、エプロンをこちらへ渡してリビングへ向かった。

よし、ここからは想像力だ。味や見た目から考えれば、自ずと必要な材料や調味料がわかるはず。常識を守りつつ、はみ出しつつの絶妙なバランスを目指す！

野菜はとりあえず食べやすい大きさに切り、肉には塩コショウを振って下味をつけておく。今日の疲れが吹き飛ぶような味のハーモニーと、明日への活力が湧くような食べごたえがほしいところ。そうなるこれとこれと…。

そうこうして完成した野菜炒めを大皿に盛り、テーブルの真ん中に置いた。まず見た目としては悪くない。むしろ、良い。初心者にしては天才的とも言える。鮮やかな彩り、ツヤツヤとオイルを纏った姿、エネルギッシュでエスニックな香り。

家族四人、口を揃えて「いただきます」と言うと、母、弟、父の順でてんで皿をつつい

た。野菜炒めを食べるとひとこと。

「なんか、お兄ちゃんみたいな味ね」

ん？真意を図りかねる本日のシェフを見て、三人は笑う。

「この物腰柔らかい味付けの中に、猛烈に主張してくるニンニクが、"それ"すぎるよね！ははは！美味しいんだけどね、なんかもう、あっははは！」

母は朗らかに指摘する。ツボに入ったようで、腹を抱えて涙を流している。

「力を入れどころを見つけた兄ちゃんみたいだ」

弟もにんまりしながら笑っている

「少し力を入れ過ぎている節も含めてそっくりだ。しかし、美味い」

父は冷静に品評する。

自分ではよくわからないが、かなり美味しいってことだろうな。こんなに楽しそうに食べているんだから。

家族みんなで一緒に笑って夕ご飯を食べた。これは中々手ごたえがいいぞ。

水曜。弟の知らないムズカシイことも解るんだというところを見せよう。

高校の図書館で、なるべく長くて難しい本を教えてもらい、早速借りて帰った。翻訳された海外の小説らしく、全部で十巻ある。普段借りることのない本の重さにどこかワクワクさえしながら玄関のドアを開け、リビングの机になるべく自然にその本たちを置いた。古い本が故、どう置いてもあからさまに浮いているのは自明だったが、大事なのはここからだ。

少し後になって、弟も帰ってきた。私は小説の一卷を手にとり、読書に耽るポーズを取る。有難いことに、この一卷が恐ろしく分厚い。それを、解ったような顔をしてページを捲っていく。

「兄ちゃん、なに読んでるの？」

「ん？これは海外の小説だ。そんなに難しくない。読んでみるか？」

「こんなに分厚いの読めないよ〜。兄ちゃんは頭いいからわかるんだよ」

不覚にも嬉しさに破顔しかけるのを、すんでのところ耐えた。

「お前も学校の勉強がんばれば読めるようになるよ」

実際、先生から事前に聞いたマドレーヌが出てくるシーン以外、頭に入ってこなかったが、弟から褒められたのでよしとしよう。

木曜。粘り強い人間力を見せよう。

今日は先約があって帰りが少し遅くなった。さて本日の尊敬ポイントは。

「最近ずっとこのゲームやってるな。おもしろいのか？」

「おもしろい。いろんなオバケ捕まえるんだけど、弱点とか見つけるのが結構楽しい。でもさ、このステージのボスがめちゃくちゃ強くてさ、全然クリアできないんだよ」

「そっか、兄ちゃんやってみていいか？」

弟がゲームで行き詰まっているという、すでに調査済みの事実を元に、弟に白々しく提案する。実際コツが必要だったが、事前に調べた攻略のヒントを頼りに何度か挑戦した。気付けば二十回程トライ&エラーを繰り返し、やっと勝利することができた。

「すごいよ！ほんとに兄ちゃんこういう粘り勝ちするの得意だよ。尊敬する」
それを待っていた！

○

「あれ？兄ちゃんは？」

夕食の準備をする母さんの背中に聞く。

「今日木曜でしょ。おばあちゃんとお見舞いに行ってるのよ」

「あ、今日って木曜か。兄ちゃん、今日もお花買って行ってるのかな？」

「だと思わ。いつも偉いよね。おばあちゃん、お花好きだもんね」

兄ちゃんは、おばあちゃんが入院してる病院に、毎週季節の花を買ってお見舞いに通ってる。元々花には詳しくないくせに、水曜の夜にいつも、次の日買いに行く花を調べているから、花博士みたいになってきた。

「そういやあんた、この前書いてた作文はできたの？明日までよね」

「とっくに書けてるよ～。書きたいこといっぱいあったから、どれ書こうかちょっと悩んだけど。本人には絶対言わないでよ、恥ずかしいから」

念入りに口止めしても、「はいはい」って母さんにはぬるく流された。まあ、言っちゃったなら言っちゃったでいいんだけど。

「そういや、今週の兄ちゃん、なんか変だったね」

「あら、そう？」

「やってることはいつもと変わらないんだけど、なんか、頑張ってた？」

言ってる自分でもよくわからなかったけど、そんな感じがした。

○

木曜深夜。満月が「スパッと諦めて楽になれ」と慰めるように煌々と輝いている。

ああ、なんと無情なことか。これだけ、頭をこねくり回して、ただゲームをクリアしたのみ。大山鳴動して、ひとつ分ほどの株が上がっただけか。いや、ひとつ分にすら達していないかもしれない。兄として、もっとかっこいいところを見せられたはずなのに。なんとも不甲斐無し。十六年生きてきて、私は何を学んできたというのか。弟に貫禄のある兄像を見せられず、なにが長男か。

弟よ、特に書くところのない兄は捨て置いて、母さんや父さんのことでも書きなさい。母さんは抜けているところがあるし、父さんはレタスのことをずっとキャベツと呼んでいる

けれど、この愚兄よりは断然書いて然るべき良いところがあるはずだ。

ああ、情けない。何て役に立たない兄だ。

金曜の朝。今日の三時間目に作文の発表会があるのだと弟は言う。

「いってらっしゃい。大きな声で読めよー」

努めて明るく言ったつもりだが、センチメンタルな兄はまだ傷心中。せめて、弟が立派に発表するのを願うのみであった。先生、弟に罪はないのです。悪いのはこのでたためにポンコツな兄なのです。

午後の昼下がり。

「では、続いて発表をお願いします」

「はい。読みます。『僕の尊敬する人。その人とはもう十二年の付き合いです。僕は小さい頃から、その人の後ろにずっとついて回るような子どもでした。僕から見るとその人は、何でもできるヒーローみたいです。本当はいろんな失敗や、恥ずかしいこともあるのかもしれないけど、僕の前でその人はいつも頼りになって、自信にあふれています。まわりの人が喜んでくれたり笑ってくれたりするのが好きみたいで、いつも、好きならば人のために何かしています。時々、変なことを思いついて、熱心に取り組んでいたりもするのは、見ていて面白いので、それも良いところだなと思っています。————その、僕の尊敬する人は兄です。僕は兄ちゃんみたいな、カッコいい人になりたいです。』終わりです。ありがとうございました」